民族のこころ(129)

真夏の結婚式

小　田　淳　一

8月のアンマンは日中の日差しは厳しいものの湿度が低い分だけ日陰に入ると結構しのぎやすく，夜になると風が出て一段と涼しくなり時には肌寒いほどである。中東の音文化と表演文化の調査を目的とする水野信男隊（兵庫教育大）は，昼間の熱気の余韻を感じさせる，まさに熱い表演＝パフォーマンスを幾晩かにわたって目の当りにすることが出来た。

滞在したホテルのエントランス・ボーイ，アナス君はホテルで行われる結婚式の音楽担当でもあり，我々の調査目的を知ると便宜を図ってくれることを申し出た。アラブの結婚式で音楽といえばザッファzaffa（行列／行進）である。ザッファは婚家の門前から戸口までを参列者が二列に並んで道を作り，先導者が新郎新婦を寿ぐ祝言（「高砂」の言わばアラブ版である）を朗唱しながら進むというもので賑やかな音楽が付随する。アナス君によるとアンマンではスタイルの異なる4種類のザッファが婚家の出自に応じて行われている。ヨルダン，エジプト，パレスチナ，そしてシリアである。

我々がまずお邪魔したのはアナス君の友人の結婚式で，ザッファは地元ヨルダン風のものである。陽が落ちる少し前に丘の上にある小さなホールへ着き，楽器の説明などを楽員から聞いているうちに新郎新婦が騒々しいホーンの音と共に派手な車で到着した。すぐにタブラやマズハルが刻むリズムに乗ってバグパイプが旋律を吹き始めた。ザッファの経路は車から降り立った地点からホール入口までの短い距離だったが，戸外ではバグパイプの音が澄んだ夜空によく通っていた。ザッファ社中は出番が終わると，着替えもせずにそそくさとヴァンに乗り込んだ。かき入れ時なので次の宴会場へと向かったのだろう。

次にアナス君が誘ってくれたのはシリア風ザッファで，彼曰く他のスタイルとはまったく異なるものらしい。会場となるホテルに移動してしばらくすると，赤と黒を基調とする衣装を着て剣と盾を手にした精悍な顔つきの一団がやって来た。肝心の新郎新婦を待っていると別のカップルが先に到着してしまい，幸運にもエジプト風ザッファを聞くことができた。ヨルダン風とは少し異なり，バグパイプではなくトランペットが旋律を吹いていたが，朗唱のテーマはヨルダン風のものと同じだった。

いよいよシリア風ザッファが始まった。最大の特徴は旋律楽器がないことである。朗唱に応答するのは打楽器群であり，技巧を凝らさない力強さに満ちている。他のスタイルのようにテンポは上がらず悠揚たる趣を損なうことがない。zaghārīd（女性の高い顫音）が加わって最高潮に盛り上がり宴会場に近づくと，圧倒的なクライマックスの中でザッファは終わった。宴会場で行われたパフォーマンスではザッファの時には飾りだと思われた剣や盾が今度は主役となる。打楽器が連打される中を楽員たちが真剣を構えたまま前転をしたり，剣と盾で激しく打ち合う動きの速い壮絶な剣舞に我々は目を奪われた。バンドのリーダーはこう語った：我々のザッファは個々の「家」を寿ぐのではなく，わが「民族」を称えるためのものなのだ。興奮覚めやらぬまま帰る道すがら，今ではお馴染みのザッファのテーマが民家の方から風に乗って聞こえてきた。この季節がまさに結婚シーズンであることを実感する一瞬だった。

インターネット上に AlZafaf という米国在住ムスリムのための結婚相手紹介サイトがある。お互いに生涯の伴侶を得たカップルを寿ぐのはどのスタイルのザッファなのだろうか。